



映画「みちのく秋田 赤い靴の女の子」  
統括プロデューサー

明治期に本県で生まれ、米國に渡った女性の実話を基にした映画「みちのく秋田 赤い靴の女の子」が今年春公開を迎える。2020年を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大により、撮影中断と大幅な公開延期を余儀なくされた。撮影は昨年9月に終了し、現在は編集作業が進められている。制作委員長で統括プロデューサーの大山雅義さん（77）秋田市出身に、コロナ下での映画づくりや、公開に向けた思いを聞いた。

―制作の経緯は。

「童謡『赤い靴』の話を調べていた5年ほど前、たまたま帰省した際に秋田市立中央図書館明徳館（現きららとしょかん明徳館）前で母子の銅像を見つけた。『秋田の赤い靴』像とあり、さらに調べて2人の物語を知った。現代社会に訴えるテーマがあり、日本人、秋田県人として、これは映像として残さなければいけないと強く思った。首都圏の本県出身者に声を掛け、デザイナーの松本一美さん（埼玉県住、秋田市出身）らが賛同してくれて、18年11月に制作委員会を立ち上げ、協賛を募るなど活動してきた」

―どのような物語か。

「主人公は、獄中で生まれた金子ハツ（1887～1937年）。生みの親を

## 愛と絆に胸を打たれる物語

失ったハツを米國人女性宣教師ハリソン（1859～1937年）が引き取り2人は米ハワイに渡った。日露戦争後、米國で日本脅威論と排日運動が広がる中、ハツはハリソンに支えられて米本土の大学を卒業。ハワイで教職に就いたものの、病により若くして亡くなる。血のつながりがなく、国籍も違う2人の強い愛と絆に胸を打たれる」

―出演者やスタッフに、秋田ゆかりの人を多く起用

## 今春公開へ支援募る

手市出身。ハツの幼少期も県内の小学生が演じた。監督・脚本は石谷洋子さん（横手市出身）、ハツ役に女優安田聖愛さん（湯上市出身）、ハツの母ふじ役にタレント壇蜜さん（横

大山 雅義さん

に克蘭クインし秋田、横手、仙北、由利本荘の各市でもロケを行った。吹雪の翌日の場面なのに、雪不足に悩まされるという苦労もあったが、まさか感染症にまで苦しめられるとは思わなかった」

―コロナ禍の影響は。

「映画撮影の現場は大勢の人が集まる『密』な空間。新型コロナウイルスの感染が徐々に広がっていた20年2月、もし感染者を出したとすることを考えると、いったん制作を止めざるを得なかった。関係者のワクチン接種を進め、現場の対策を徹底し、21年夏に撮影を再開。経費は大きくかかっているが、約1年半の間に脚本を磨き上げるなど、より良い作品にするた



おおやま・まさよし 49年11月、秋田市飯島生まれ。秋大付小・中、秋田中央高、東海大を経て、映画制作会社にカメラマンとして入社。その後フリーに転じ、映画やドラマ、ドキュメンタリー番組などの制作に当たる。現在は映像企画・制作会社ヌーベル（東京）代表。都内住。

めの準備ができた部分もある」

―今後の展開と、作品に対する思いを。

「撮影中断の影響で制作費が厳しい状況にあり、3月中にクラウドファンディング（CF）で支援を募ろうと考えている。目標額は200万円程度。本県出身者が可能な限り秋田にこだわって作る映画なので、CFの返礼にも秋田名物を盛り込みたいと話している。配給に関しては、全国で映画館を展開する企業と交渉中。コロナ次第だが、各地の県人会でも上映会を開きたい。今回、この映画を撮るためにさまざまな資料を調べ、秋田を再発見できた。一人でも多くの人に秋田を訪れるきっかけに、県内の人には秋田に誇りや自信を持ってもらえる作品にしたい」

（聞き手＝小松田直嗣）

©秋田魁新報社

首都圏発

取材依頼、情報提供は tokyo@sakigake.jp